

大濱徹也著
『アーカイブズへの眼
——記録の管理と保存の哲学』

山本 圭

今日のアーカイブズ科学は、国際公文書会議が2008年に6月9日を「国際アーカイブズの日」と定めたことから窺い知れる様に、多くの注目を惹くものとなりつつある。アーカイブズとは、主に過去の文書の記録と保存を目的とする行為とその諸施設のことであるが、昨今においては、音声資料や映像資料を蒐集・保存するデジタル・アーカイブ、さらには縦横無尽に日々生産され、消滅していくウェブ・サイトを蒐集するウェブ・アーカイビングなど、その対象は広い。本書はこのようなアーカイビングに纏わる新たな動向を背景としながら、われわれにとって、もしくは共同体なるものにとって、「アーカイブズとは何か」を今一度問いかけるものとなっている。その意味で、アーカイブズの重要性を再度強調すると同時に、出来るだけ平易な文章で読者に語りかけようとする著者の姿勢は、アーカイブズに関する意識が極めて希薄な我が国においては特に貴重なものであろう。

著者が折に触れて指摘しているように、我が国におけるアーカイブズをめぐる現状とその認識は、例えば欧米などの国と比較して、必ずしも芳しいものとは言えない。昨今世間を賑わせている「消えた年金問題」を挙げるまでもなく、民間組織のみならず公的機関においてすらアーカイブズの重要性はまだまだ十分に認知されていないのである。この問題の背景にあるのはやはり、アーカイブズというわれわれの記憶に纏わる営みが、その対象でもあると同時に担い手でもあるべきはずの市民の側にうまく根付いていないことであろう。

そもそもウンベルト・エーコが『薔薇の名前』で描いているように、中世西欧社会において資料館、文書館は、権威と権力を表す象徴的存在であり、下々の者が入室はおろか、近づくことさえも許されない神聖な場所とされていた。しかしフランス革命がアーカイブズを人民へと解き放つことで、市民が記録保管所の閲覧を権利として請求できることがはじめて認められたのである。この歴史を鑑みても明らかのように、あるいは本書において著者が幾度となく強調しているように、アーカイブズはまさに「記憶の宮殿」として、民主主義社会にとっての中樞を占めているといえよう。つまりわたしたちは、このようなアーカイブズへの接近可能性を担保されている限りにおいてのみ、権力の暴走をチェックし、あるいは権力の恣意的な運用を警戒しながら「開

かれた社会」を形成していくことが出来る。この「記録への目」の涵養度が同時に、その国家、もしくは共同体の政治文化の成熟度も示すということも頷ける。したがって著者が言うように、我が国において記録と記憶についての意識が欠落しているとすれば、それは日本の民主主義がまだ未成熟であることを示しており、それゆえ今日、アーキビスト育成や記録管理法の整備など早急な対策が求められるところである。

ところで本書において著者は、極めて特異な視点からアーカイブズと民主主義を関連付ける。それによれば、アーカイブズは「ヘゲモニーを保障する器」であるという。ここでヘゲモニーとは、イタリアのマルキシスト、アントニオ・グラムシの用法、つまり「自らの道徳的・政治的・文化的価値というものを他者に承認させるか否かが、ヘゲモニーつまり主導権をもつということ」（本書70頁）を意味している。つまりヘゲモニーを手中に収めるために、言い換えれば他者に自らの優位性を承服させるために、アーカイブズが重要な器となるのである。著者が触れているように、このような方法で、つまり議事録から「苦すぎる真理」を引き出し、反対派を押さえつけたのは他でもないレーニンであったのだ。このようにアーカイブズをヘゲモニー闘争のための有効な道具と捉えるという著者の指摘は、現代民主主義理論にとっても重要な論点を提起しているように思われる。例えば、今日の民主主義理論の二大潮流としては熟議民主主義モデルと闘技民主主義モデルが挙げられる。熟議モデルが討議の合意を重視するのに対し、闘技モデルは討議の不一致、もしくは合意の不可能性を民主主義の条件とする。これらの議論は確かに重要ではあるが、しかしながらこれらは具体的な民主主義社会のイメージを提示しえていないという点では一致している。本書が示したように、アーカイブズを民主主義へとつなぐ糸は、時に抽象的に過ぎる空中戦に陥りがちな政治理論にとって、より立体的な公共圏モデルのための手がかりになることは間違いない。

本書が提起している論点は、民間企業アーカイブズ、大学アーカイブズのあり方と意義など多岐に渡る。それらはいずれも等しく重要なものではあるが、その背景にある著者の確信は一貫したものである。すなわち、「国家の営みをわれら一人ひとりが統治の主体者として検証することが、明日を現在よりもよりよき社会にしうるのだという強き思い」であり、われわれがアーカイブズを己のものにすることによって、現在の閉塞状況を打開するチャンスが生じるとの信念である。したがって、アーカイブズは埃に塗れた過去の文書のみにかかわるだけではない。そうではなくジャック・デリダが指摘しているように、「それは未来の問い、未来それ自体の問い、明日への応答の、約束の、責任=応答可能性の問い」（Jacques Derrida, *Archive Fever: A Freudian Impression*, trans. by Eric Prenowitz, Chicago: The University of Chicago Press, 36）なのである。そうであればこそわれわれは、「アーカイブズとは何か」について、今一

大濱徹也著『アーカイブズへの眼——記録の管理と保存の哲学』

度思いをめぐらす必要があるのであって、本書はまさにそのような「アーカイブズへの眼」をわれわれが持つことを強く要求している。 (刀水書房 2007)